現役専門予備校での辞書指導

吉田　明宏

●予備校での辞書指導

私は普段，現役生専門の予備校で，中１から高３に英語を教えています。学習段階に応じて，文法中心，英文解釈中心，実践演習形式，などと授業スタイルを使い分けているのですが，高校生に英文解釈の指導をする際には，初期の時間の多くを「辞書指導」に費やしています。

授業では，テスト時以外いつでも自由に辞書を引いてもよいルールにしており，「この単語を辞書で調べましょう」といった指示も頻繁に出すため，「英語学習を進めるためには，まず辞書が引ける人になってちょうだい」とお願いしています。

生徒は「辞書くらい引けるぞ」という顔をしますが，しっかりと時間をかけて繰り返し丁寧に指導をしないと，なかなか辞書を引けるようにはならない，というのが私の実感です。

●１つの語には複数の意味がある

生徒は，辞書を引いても，最初に目に飛び込んできた意味をそのまま書き写して目の前の英文に当てはめてしまいがちです。「１つの語には複数の意味がある」という，我々からすると極めて当たり前の事実を，生徒たちが痛切に実感する形で伝えるために，よく以下の例文を提示します。

Hunger drives the wolf out of the woods.

（空腹によってオオカミが森から出てくる）

drive には「追いやる」という意味があることを，辞書で確認させるための例文ですが，ためしに辞書なしでこの英文はどんな意味かと問うと，

×ハンガーさんは森の外でウルフを運転する。

×フンガーさんが森の外でオオカミをひく。

など，様々な珍解釈が飛び交います。上記の誤訳は，自分たちでもなんとなく「おかしいぞ」と思うらしく，たいていの場合笑いが起こります。

そこで，おもむろに「drive には『車を運転する』以外の意味があるから辞書で確認して，この英文を正しく解釈してみよう」と投げかけると，生徒たちは誰よりも先に正解しようと，嬉々として辞書で drive を引き始めます。もちろん，文頭の hunger も調べるよう指示を追加します。

また，動詞は語法によって大きく意味が異なることを伝え，必ず語法表記を確認させています。

動詞の語法指導では，まず自動詞と他動詞に注意を向けさせる例として，stand（我慢する）や run（経営する）をよく用います（×のついた日本語は実際に生徒が書いた訳例です）。

I can’t stand the pain in my leg.

×私は足が痛くて立ち上がれない。

He runs a karaoke bar.

×彼はカラオケバーで走っている。

●成句を調べる

生徒は成句を調べるのが苦手です。語義にはよく目を通すようになっても，成句を確認しない場合があり，in favor of . . .（…に賛成の）を含む英文を訳させると favor を「親切な行為」などとしている答案がたくさん出てきます。紙辞書を使っている生徒は，少し視野を広げると，in favor of . . . という成句が目に飛び込んできますが，電

子辞書の場合は「成句」ボタンを自ら押さない限り，in favor of . . . にたどり着けません。一度も成句を調べたことがないという生徒にも毎年出会います。そういう時は生徒のもとに行き，成句の表示の仕方を教えるのですが，機種によってボタンの配置が異なりますので，ときどき家電量販店の電子辞書コーナーで最新機種に触れ，私自身が各メーカーの操作方法に慣れるようにしています。

●知った語こそ調べよう

上記の favor は「favor そのものを知らない→辞書を引いた→成句までたどり着けなかった」という例ですが，生徒が最も苦手とするのは「知っている語だけでできている成句」です。新出語を含む成句（take O into consideration など）は，とりあえず新出語（consideration）を調べようとするので，その際（ついでに？）成句も見てみる，という習慣はつけやすいのですが，It is true . . ., but . . . などは，そもそも辞書を引こうとしてくれません。「…は本当だが」と直訳でも済みますが，指導する側としては，これも成句として登録されている大切な表現であると伝えたいと思います。

予習時にこの成句を調べてくる生徒は1割にも満たないのですが，こういうときこそ成句調べの大切さを指導するチャンスです。「It is true . . ., but . . . を『なるほど…だがしかし…』と訳している人がいます」と紹介すると，一部の生徒からは，「それはやりすぎだろう」「適当に書いたんじゃないの？」という反応が返ってきます。そこで，「いや，これが書けた人は素晴らしい。成句として辞書に登録されているのをちゃんと調べたんだから」と褒め称えると，みなが一斉に辞書で調べ始めます。こういう体験を何度も積み重ねると，「知った語も調べてみよう」という姿勢が身についていきます。

●固有名詞も調べよう

生徒はまた，大文字で始まる単語を見ると，勝手に人名だろう，とか，地名だろうと高をくくって辞書を引かないことがよくあります。前述の Hunger も，そういう思い込みが原因で珍解答につながった例ですが，本物の固有名詞も辞書で確認するよう指導しています。

先日，高1の授業で，Robinson Crusoe が英文に出てきたのですが，「クルーズ」「クルソエ」などが続出し，「ロビンフッド・クルーション」という，もはや原形をとどめていない謎の人物まで登場してしまいました。Einstein を「エインステイン」（ローマ字読み！），Descartes を「デスカルテス」（なんとなく響きが強そう!?）などとする生徒もいます。辞書で確認することに加え，「アインシュタインやデカルトは，読めるようになっておいたほうがいいよ」と指導しています。

また，有名人でなくても，よくある人名は記載されています。以前 Susie を「スシエ」と微妙に日本人っぽい名前に訳した（？）生徒がいましたが，そうしないためにも辞書で確認する癖をつけさせています。

●「辞書さえあれば読める」を目指して

指導が断片的で一過性のものにならないよう，英語科の有志が集まって作成した辞書指導用のワークブックを使い，発音表記や語形変化，品詞の識別法，形容詞の限定用法と叙述用法の違い，などを取り上げて，辞書を最大限に活用するための体系だった指導を行っています。

どんなに英語を学び続けても，知らない単語はなくなりませんが，生徒たちに「辞書さえあればどんな英文でも読める」という自信をつけさせることができれば，その生徒は一生，英語と積極的に関わってくれると思います。そのような生徒を一人でも多く世に送り出したいと思いつつ，今日も教壇に立っています。

（よしだ　あきひろ・研伸館講師）